

全教神協広報

第一一七号

全国教育関係神職協議会

〒一五〇〇五三

東京都港区代々木一〇一

電話 〇三三三七九八〇一

Fax 〇三三三七九八一九九

神社本庁内
題字 諏訪秀一氏

議論や協議の行方

全国教育関係神職協議会 副会長 吉田 道明



てきたやうにも見える。「初対面」にも似たよそよそしさが忌憚のな意見交換を阻害する要因ではなからうか。

わが全教神協も他団体同様、会員の高齢化と若者（現職教員）の減少が最大の課題となつてゐる。かつて（平成十六年）は百二十人もゐた総会・全国大会の参加者が、今や七、八十人規模となつてしまつた。そこかしこで見られた都府県を越えて旧交を温める光景も、単位教神協の身内のみに限られ

かやうな現状はもちろん嘆かましいことであるが、悲観的なことを論へばきりが無い。問題は、この現状を具体的にどうするかである。本年八月の兵庫大会（姫路）の全体会で、かうした議論の場はじめて設けられた。端的に言へば、「大会開催の曜日の再考を」とか「分科会テーマに副題をつけてはどうか」など従前、役員の気づかなかつた点を御指摘いただいた

たことはまことにありがたく、今後の議論にそれを敷衍して行く必要がある。

それを踏まへた上で、私は再び提言する。「実践の積み重ねこそ力」である。

本年四月以来、何回か私の実践を披瀝し、ご批判を仰ぐ機会を得た。参会者だけでなく企画運営担当の方や、他の講師の方からもさまざまなご意見をお伺ひできた。お話を伺ひする中で決まつて落ち着くのは、「やつてもいないことを言ふことのむなしさ」と、「議論倒れで実践を伴はないことのみじめさ」である。幸ひわが組織は全国大会に分科会を設けてをり、分科会それぞれのテーマをもとに、実践に基づく議論・協議が行はれてゐる。そのモデルとなる実践例は、六月に開催される現職教員等研修会の講義にみられる。これについては他に譲るが、視点や内容が斬新な実践が分科会で報告された。

報告されないだけで、実は会員の多くはさうした実践事例をお持ちなのである。分科会での議論・協議が進むにつれ、斬新な視点や長期的な積み重ねを有する事例が紹介される。中にはまねのできないやうな実践例だけでなく、自分の置かれた環境に照らして、すぐにでも着手できる実践事例もある。要は、大会終へて一人になったとき、動き始められるかどうかである。その実践の蓄積を持ち寄る全国大会でありたい。

今後はその報告事例や協議した内容を、各ブロックや都府県教神協で共有する一方、会員それぞれの活動の場で具体的な実践をすることが欠かせない。「言ふだけで議論倒れの教神協」ではなく、実践の積み重ねをもつて教育現場や氏子・総代、さらには地域社会に訴へ、存在感のある教神協でありたいと願ふ。